

京都薬科大学
KPU NEWS 編集委員会

KPU NEWS



新年のご挨拶

理事長 武田 禮二

新年明けましておめでとうございます。

皆様方には新たな気持ちで新年を迎えられた事と存じます。

昨年の3月には未曾有の東日本大震災で多くの方々の命が奪われ、被災地に大きな爪あとを残しました。また、9月には台風による水害被害等日本列島に大きな災害をもたらしました。仮設住宅や避難地で新年を迎えられた方々も多くおられると思いますが各地の一日も早い復旧・復興をお祈りいたします。

さて、本年は薬学の歴史に新しい1ページが開かれる輝かしい年で、6年制薬学教育の第1期生が巣立っていきます。社会が要求する現場で即戦力の臨床薬剤師としての活躍が大いに期待される年でもあります。

ここ数年来、薬学受験生の数が減少してきましたが、昨年（2011年）は、薬学受験生数の減少が下げ止まり、上昇傾向が伺われます。これは一部の大学が入学定員を減らしたこともありますが、世間におい

て、新制度下で薬学教育を受けた臨床薬剤師の果たす役割に対する理解が多少浸透してきたように思えます。このような状況下、対前年比での受験生が増加した大学も数多く見られますが、残念ながら本学の受験者数（ピーク時の半数）は前年比において減少し、まだまだ、130年近い歴史と伝統のある京都薬科大学としての本来の底力を出し切れていないのが今の姿です。この3月に越えなければならない大きな難関、6年制最初の薬剤師国家試験があります。薬系大学にとって、その結果は重要な意味を持ち、大学の評価にも繋がって参ります。残り2ヶ月余、学生と教職員が一丸となって100%合格を目指して取り組まなければなりません。

2011年度には薬系大学の40%近くが定員割れとなり、薬学部の統廃合も話題になり始めました。他大学もこのような過酷な状況下で勝ち残るために種々の対策を講じています。本学も2007年から5年間の中期計画“躬行プラン”を策定し、推進して参りました。躬行プランもこの3月末までですが多くの課題を

CONTENTS

新年のご挨拶 理事長 武田 禮二	1～2	第97回薬剤師国家試験	20
年頭のご挨拶 学 長 乾 賢一	2	11月のオープンキャンパス開催	20
特集 東日本大震災ボランティア活動報告	3～7	クラブだより	21～22
2012年度本学大学院薬学研究科薬学専攻博士課程(4年制)及び薬科学専攻博士後期課程(3年制)入学選考結果	7	京薬祭2011を終えて	23
2012年度推薦入学試験結果	7	2011年度動物慰霊祭	23
異文化体験	8～13	KPUシンポジウム報告書	24
奏楽館完成	14	「光と色のイリュージョンin 山科」開催	25
グラウンドの南側に薬用植物補助園完成	15	京都薬科大学公開講座開催	25
バイオサイエンス研究センター着工	16～17	受賞・掲載	26～27
2011年度後期試験日程	18	お知らせ	27
Library News	18	京薬会だより	28
教育後援会からのお知らせ	19	京都薬科大学奨学寄附金ご芳名録	28

達成し、その改善が6年制教育・研究環境や奨学金制度等の各種制度の整備に繋がっています。今後の課題として、6年制を卒業した本学の学生が臨床薬剤師であるとともに、企業の研究職や大学教員としても通用する科学者として育成する必要があります。それには、本学の特徴である研究力の更なる向上や研究環境の整備を行う事、並びに学生のレベルアップを図っていく事に重点を置いて大学運営を行っていききたいと思います。そのためにも、引き続き安定し

た財政基盤の充実と拡充を目指します。

また、本年4月からは第2期中期計画がスタートします。現在アクションプランを策定中であり、本学の独自性と存在意義をアピールするためにも構成員が一丸となって第2期中期計画の推進に立ち向かう必要があります。本年も初心にかえり、皆様方と共にナンバーワンの薬科大学の実現を目指して努力いたします。皆様方の変わらぬご支援・ご協力を賜りますよう、本年もよろしくお願いいたします。



年頭のご挨拶

～歴史と伝統そして未来への挑戦～

学長 乾 賢一

皆様、新年あけましておめでとうございます。東日本大震災からの一日も早い復興を願いつつ、それぞれに新たな夢や希望を抱いて新しい年をお迎えになったことと存じます。

さて、本年3月には新しい薬学教育の下で最初の卒業生、薬剤師が誕生します。長年の悲願が実現した喜びと同時に、社会の期待に応える薬の専門家として活躍してくれるであろうかという不安も入り交じります。6年制薬学教育で学生がどう変わったかという最近の話題では、医療人としての意識の向上、コミュニケーション能力の向上、医療薬学や治療に関する知識が深まったなどポジティブな変化と、一方、研究に対する意欲の低下などネガティブな一面も指摘されています。しかし多くの難問を抱えながらも、関係者の努力によって薬学共用試験（CBT、OSCE）や実務実習等、改革の基本となる事項はおおむね良好に進んでいます。あとは薬剤師国家試験が気になるところであります。薬系大学にとって国試の結果は、入学志願者の動向にも影響するだけに、その対策には相当な力点が置かれていることは言うまでもありません。

翻って本学の状況は如何でしょうか。薬学6年制を見据えて計画的に進められてきた建物等のハード面の整備はほぼ完了し、すばらしい教育環境が整いました。本学の歴史をイメージして設計された中央庭園は、学生の憩いの空間として機能しており、またここを中心として繰り広げられた昨年11月の京薬祭は圧巻であり、学生達のエネルギーに感激しました。一方、ソフト面、すなわち教学の中身はどうでしょうか。すべての教員の英知を結集し、事務職員の協力を得ながら6年一貫の教育改革が進められてきましたが、4月の新入生からは、初年次教育の充実等さらに改善された新たなカリキュラムが始まります。実務実習につきましては、本学独自の特命教員を配した『ふるさと実習』が軌道に乗り順調に進展しています。これは伝統ある本学ならではの大学

からも注目を集めています。私は着任以来、Science（科学）、Art（技術）、Humanity（人間性）のバランスのとれた人材育成を唱えてきましたが、高度の専門的能力や研究能力をそなえた薬剤師「ファーマシスト・サイエンティスト」の育成は、まさに本学の歴史と伝統に沿うものとして学内のコンセンサスが得られてきました。また6年制薬学部の上に立つ、新たな4年制博士課程の大学院が本年4月からスタートします。幸いにも本学の4年制博士課程は、国立大学にも勝る規模の大学院として出発できる見込みです。本学の伝統と実績を基盤にしながら、後継者の育成とともに、変革する医療や製薬産業界に新たな活力となる博士号取得者を送り出すことができることを夢見しているところです。

ところで、今、各分野の最大の悩みは、配属された学生数の多さにあると聞いています。また、分野内においても学年ごとにまとまる傾向が強いようです。しかし、他の学部や研究所から見ると、これは贅沢な悩みと言われるかもしれません。これらの問題を克服するためには発想の転換を必要とし、「屋根瓦方式の教育」の実践を強く訴えたいと思います。これは限られたマンパワーの中で編み出された教育、すなわち上級生が下級生を教えるという医学領域の教育方式であります。創意工夫によって各分野においても十分導入可能であり、研究テーマや技術の継承、質の高い研究に繋がるものと確信します。

今激動の変革期に立つ薬系大学において、我が国薬剤師の90%以上を養成している私立薬科大学の役割・責任は極めて大きいと考えます。その中でも、128年の輝かしい歴史と伝統を持つ本学に対する注目が高いことは否めません。教員、事務職員、学生の皆さん、本学の歴史と伝統を基盤にして、輝ける薬学の未来に向けて挑戦しようではありませんか。

最後に皆様のご多幸、ご活躍をお祈りし、新年のご挨拶とさせていただきます。

特 集

東日本大震災ボランティア活動報告

2011年3月11日14時46分18.1秒にマグニチュード9.0・震度7の東北地方太平洋沖地震が発生し、未曾有の東日本大震災をもたらした。大地震と大津波による人的物的被害の真の全貌は未だ確定されてはおらず、また福島第一原発の事故を中核とする多方面に亘る大震災被害の収束時期については全く予想も付かない状況にある。

東日本の沿岸部に住む人々の生活を激変させた震災のテレビ中継映像を見ながら、同じ日本人として、否人間として何か為すべきではないかと考えた人は多いはずである。だが、それを実行に移すことには、職務上直接的に関わりのある人々を除いて、実際上困難が伴う。しかしそれに関わらず、震災支援と復興支援のボランティアとして現地で活動した2名の学生諸君と2名の薬剤師の方々からの貴重な活動報告が、ここに掲載されている。

私たちは今何をすべきなのだろうか。この報告にもあるように、まずは大災害にあった人々のことを忘れることなく、その人々の今現在の暮らしを思い浮かべることであろう。その営為の中から何を為すべきかが自ずと立ち現れてくるはずである。特に学生諸君は、勉学に励み医療人の一人たる立派な薬剤師になることが、将来的に貴君等のなし得る支援のひとつであることを肝に銘じて欲しい。そのことは、猪奥氏の「(阪神・淡路大震災から)16年を経て今回、薬剤師は医師や看護師からまた社会からも認知され必要とされる存在になったことを、あらためて実感して嬉しく感じました」という言葉から読み取れるはずである。

3. 11から

3年次生 阿部 誠也

みなさんはあの日のこと覚えていますか？2011年3月11日、東北で東日本大震災が発生しました。私は生まれも育ちも福島です。当日、カンボジアにいた私は急いで実家に電話をし、家族の無事を確認しました。そんなカンボジアのホテルのテレビで自分の母校が避難所として映されていたという衝撃を今でもよく覚えています。

“自分も何かしたい”そう思っていた私はGWの休みを利用して、福島県相馬市にボランティアに行きました。9.3m以上もの高さの津波が到来した福島県相馬市は沿岸の住宅地はまさに壊滅状態でした。かつて1年弱だけ住んだことのある福島県相馬市、当時の思い出の場所はもうすでにそこにはありませんでした。私が実際の被災地の様子を目の当たりにして一番感じたことは、この震災復興には長期的・継続的な支援が必要だということです。

そこで京都に帰ると、3年間継続して100日ごとに全国同時街頭募金を行う「100CLUBs」という団体に入り、募金活動を行っています。また、京都には震災の影響により避難している方がたくさんいらっしゃいます。そこで「あつまっぺ！実行委員会」を結成し、避難者の方たちの支援活動にも取り組んでいます。

8月には、岩手県陸前高田市や宮城県気仙沼市などでボランティア活動をしました。GWの時に比べ、瓦礫はだいぶ片付けられていましたがそこには何もない、本当に何もない荒れ地がただただ広がっているばかりでした。

被災地から、関西に帰ってくるとギャップに戸惑います。それはもちろん、周りの景色のギャップもありますが、それ以上に人の震災に対する意識のギャップに戸惑います。震災の復興は決して時間が解決していくのではなく、人が解決していくものです。他の何物をも犠牲にしないでもいい、ただ、将来を担う私たちだからこそ、この震災に無関心になっていけないと考えています。私は被災県の出身だから支援活動をしているのではなく、一人の日本人として、人間として活動しています。他人事としてではなく自分事として、この震災と見つめ合ってほしいです。



福島県相馬市の津波被害の様子



陸前高田 希望の一本松(2011年8月撮影)

「復興」とは

5年次生 松川 真理子

2011. 3. 11. この日を境に何人の人の人生が変わったのだろうか。

今年の夏、私は生涯学習サポート兵庫の「ワカモノデカラプロジェクト」に参加し、岩手県宮古市に行った。主に私が行ったことは、宮古市市内の仮設住宅の交流室でのお茶っこサロンの運営の手伝いと山田町の閉鎖になった避難所(小学校)の清掃作業である。

このボランティア活動を通して、様々な人に出会った。仮設住宅への訪問では、震災の傷を乗り越えて前を向こう、頑張ろうとしている方々や、一方で仮設住宅に引っ越してきて周りにだれも知り合いがない、何もする気にならないという震災の傷をまだ抱えている方々に出会った。元避難所だった小学校では笑顔でいっぱい小学生たちに出会った。ボランティアセンターでは東北の方々に元気になってもらおう、少しでも早く東北に活気を取り戻してもらおうという強い気持ちを持って海外も含む様々な地域から集まったボランティアの方々に出会った。

このような方々と出会って私が感じたことは、「復興」というのは、地元の人が上を向いて気持ちを強く持ち、歩んでいかないと進まないものであるということ。私たちは「復興」を行うのではなく、「復興していく手伝い」を行うべきだということだ。なぜなら、やはりその土地に住んでいた人はその人たちにしか持つことのできない地元愛をもっていると思うからである。その地元愛がないと本当の意味の復興はできないと思う。その土地で生活をしていくのはその地元の人々であって私たちではないのだから、私たちが考えて復興を進めていくのではなく、地元の人々がその地域を復活させていかなければならないと思う。

では、ボランティアとしてするべきことは何なのか。

私の考えは、ボランティアである私たち、ワカモノの力によって、まずその地元の人々の「心」を復興していく必要があると思う。また、地元の人々が頑張ろうと思えるような環境づくりをする役割を担うべきであると思う。その「心の復興」の方法は様々だと思う。私は今、「関西からできる支援」で被災地の仮設住宅に住む方々が作った作品を売り、その売り上げを被災地に贈る活動をしている。実際に大きな支援ができなくても、東北のものを買う、少し東北に興味を持ち調べてみるなど、東北のことを忘れないように何か今までの日々の生活の一部に東北を考える時間を作ること、これが心の復興につながっていくと思う。

関西の人たちにとって東北は遠く離れた場所。時間が経つにつれて震災のことを忘れていったり、支援する気持ちが薄らいでいくかもしれない。しかし、生活を少し今までと変えてみる、東北のことを考えてみることで、「人生が変わった」東北の方々の気持ちに近づくことができ、そして生活を変えた人々の小さな行動が復興への大きな力になっていくと私は思う。

東日本大震災における

病院支援業務を行って

京都第一赤十字病院 土谷 有美(S63年卒)

このたびの震災によりお亡くなりになられた方々に心からお悔やみ申し上げますと共に、被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げます。

私が、石巻赤十字病院へ派遣されたのは、5月の初旬でした。報道される被災地の状況をみて、『何かしなければ…』という焦りのようなものがありましたが、『薬剤師免許』を生かして支援ができる機会を得て、『免許』を持っていて本当に良かったと思いました。

震災から2ヶ月が経過し、院内は表面上、落ち着きを取り戻しつつあるようでした。しかし、院内には私達のような救護服を着た他施設の医療スタッフが溢れていましたし、いくつかの救護班が院内に滞在しており、どう考えても非日常が続いている状態でした。院内の職員の方々の疲弊もいかにばかりかと想像がつかしました。

派遣された私達は、院内の業務のお手伝いと、各救護班に薬剤を供給する業務、各避難所を巡回する業務などを行いました。

院内業務では、周辺の医療施設が被災したことで、通常より多くなっている救急外来の患者さんの対応（特に当直時間帯）を主に行いました。

救護班への薬剤供給は、救護班からの処方せん調剤や、常備薬の補給でした。多くの救護班では所属されている薬剤師さんが薬剤の受け渡しに来院され、僅かな会話を交わすだけでしたが、同職種というだけで非常に親近感が湧きました。被災地の限られた薬剤の中での処方や、多くの後発品が存在している中、各救護班にとっても薬剤師はなくてはならない存在だったと思います。後発品の話題では、薬剤の不足を危ぶんで全国から（海外からも）救護物資ならぬ救護薬剤が送られて来ていました。また、各救護班の交代時には、手持ちの薬剤を置いていったところによると、石巻では薬剤の供給は比較的早期に再開されたらしく、私達が支援に行った時期には多くの同種・同効薬が、中途半端な量として残っているといった状況でした。そこで、『ある薬剤を無

駄なく使い切る』ということも目標として、同種の薬剤のリストを作ったり、処方された薬剤を余っている後発品へ変更していただいたりといった業務にも取り組みました。その際にも、相手が薬剤師さんであれば、こちらの窮状も察していただけて、快く協力してもらえるので本当にありがたかったです。

避難所の巡回は、院内で寝泊りをしていた私達にとって、唯一院外へ出て周辺状況を見聞できる機会でした。何ものなれば、山や海の自然に囲まれた、風光明媚なところであったであろうところに、言葉を失うような悲惨な爪あとだけが、残されていました。業務内容は、救護班が滞在していない施設などで、お薬手帳や薬袋情報などから不足している薬剤を処方したり、お薬手帳の配布・記帳、一般医薬品の配布を行うことなどでした。避難所は、立地条件により状況がさまざまで、元市街地では、支援物資などもある程度行き届き、医療者や、様々なボランティアの方も多く訪れていましたが、周辺部になると、交通の手段もままならず、避難者同士が助け合わなければ生きていけないといった状態でした。被害の状況を目の当たりにして、復旧するまでの気の遠くなるような時間を思い、人間の非力さ・災害の理不尽さを痛感しました。床に座ってお話を伺っていると、こちらの方が涙を流してしまうようなことも多くありました。そんな状況でも、「どこから来たのか?」「ありがとう!」と声をかけてくださる被災者の方に、人間の優しさ・強さを教えられました。

『人間を救うのは、人間だ』 日本赤十字社のスローガンです。世界中から集まったたくさんの人が人を救うために活動していました。その姿からも、人間のすばらしさを感じることができました。そして、私達は『薬剤師』という大きな手段をもって、人間を救うことのできる職であるということを実感しました。

最後に、現地でお世話になった皆様、快く送り出してくれた職場の仲間感謝すると共に、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。復興までの道のりは険しいものがあると思います。時間の流れで記憶を風化させることなく、すべての人が被災地に思いを寄せて歩んでいければと思います。



避難所の学校に掲げられた旗



女川の市街地



石巻の市街地



避難所の学校の校庭で

震災支援報告

京まち薬局 猪奥 真理子 (S60年卒)

東日本大震災で被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

2011年3月11日(金)、薬局の仕事を終え帰宅すると、岩手県・宮城県・福島県の沿岸部を中心に南北500キロ以上にわたる想像を絶する地震や津波の映像が繰返しテレビから流れています。暖かい部屋でそれを見ながら、被災された方々にただ申し訳なく思うばかりで、何も出来ない自分に苛立つ日々でした。

東日本大震災の頃はちょうど実務実習受入れ第Ⅲ期の後半、3月25日に学生実習が終了するのを待ちかね早速に薬剤師会にボランティアの登録をしました。そんな焦る気持ちをくんでいただき、それから三度にわたり個人では支援が困難な遠方の大災害に、ボランティアとして被災地で活動する機会を与えていただきました。薬剤師として参加した災害支援について報告させていただきます。

報告書①

日程:平成23年3月28日(月)～4月3日(日) 7日間
活動先:宮城県塩釜市と多賀城市の避難所と薬局
グループ:民医連緊急医療支援チーム(非会員)
宿泊先:坂総合病院
坂総合クリニック(宮城県塩釜市)

支援先の坂総合病院は350床の地域医療支援病院で災害拠点病院でもある。水は地下水をくみ上げ、自家発電が稼働していたので、病院機能はかろうじて復旧していた。ただ職員も被災者で関連施設もまた被災していた。例えばデイサービスの医療生協は施設ごと津波に流され、職員を含め利用者20数名が行方不明、3名だけ生存が確認されたとの厳しい現状であった。到着翌日からは、地震や津波で住むところを失った方の避難所巡りが始まった。小学校や体育館など一日で十数か所の避難所を緊急車両で巡る。交差点は警官の手旗信号、道は日が暮れると真っ暗闇で、一般車両は津波に流されたこととガソリン不足のためほとんど通行していない。医師1～2名、看護師1～2名、調整役の事務方1名、薬剤師1名が1グループとなって行動する。医師は巡回診療し簡易カルテに記載、私はダンボール箱に用意した最低限の薬を抱えての移動である。避難所におられる多くの方が津波のため「薬」は勿論のこと、人によっては「家」も「財産」も「思い出」も「大切な家族」さえも「全部もっていかれた」とおっしゃる。また、瓦礫の中から息子さんが掻き出してきた泥だらけの薬を、個人スペース間仕切りのダンボールを台紙に簡易一包化のお薬カレンダーを作成したお年寄りのケースもあった。地区で一番大きな避難所の救護所(多賀城文化センター/約1000人収容)での夜診を終え病院に帰ってからは、きめ細やかなカンファレンスや要フォロー患者さんの申し送り、支援の在り方の議論などが夜12時頃まで行われた。しかし、直ぐに就寝される方はなく、職種にとらわれず出来ることは何でもいわずと、全国から寄せられた医薬品・医療材料から衣類に至るまで、山のように積まれた支援物資の仕分けをする。宿泊はクリニックの床に寝袋で雑魚寝である。3月末のこの頃は、急性期の疾患は落着き、慢性疾患の治療に移行していった時期ではあるが、通院の交通手段も全くなく、3日分程度の短期処方が繰返されるばかりであった。病気は劣悪な環境から起因するものが多く、治療中の基礎疾患に加え、仮設で水洗のないトイレ事情から便秘が、パンや缶詰めなど乾物中心の食事やストレスからくる高血圧、夜9時には電気が切られ寒くて仕切りのない体育館の生活から上気道炎や不眠が多発していた。居住環境を改善しなければ解決できない問題ばかりである。沈痛な面持ちの我々に対し、被災者の方はいったん話し始められると堰を切ったように、生死は紙一重だったと話される。それぞれの お人ごとに、地震から津波、そして避難に至るま

で、またご家族の安否など、壮絶で大変な思いを話された。慌しく避難所から避難所への息つく間のない移動の繰返して、じっくりお話をお伺いし、心に寄り添う時間を持てなかったのを残念に思うばかりであった。

報告書②

日程:平成23年4月27日(水)～5月1日(日) 4日間
活動先:志津川ベイサイドアリーナ救護所
公立志津川病院仮設診療所
グループ:日本薬剤師会近畿ブロックチーム
宿泊先:南三陸町総合体育館(宮城県南三陸町)

日本薬剤師会から東北道をレンタカーで北上する。3月末の派遣時は、自衛隊・警察・消防関係の緊急車両で異様な光景だった高速道路のサービスエリアも、この頃は学生ボランティアや土木復興関係の方の車で埋め尽くされていた。向かった南三陸町は特に津波の被害が大きかった地域で、町役場や防災センターは無残に鉄骨のみが残り、米紙タイムの「世界で最も影響力のある100人」に選ばれた菅野武 医師の勤務する公立の基幹病院(120床)も4階まで浸水していた。それ以外の建物は見当たらず、道路は瓦礫に覆われカーナビは役に立たず、船の転がる破壊された町を目の当りにして絶句につぐ絶句であった。避難所の状況はさらに厳しく、遺体安置用の大きなテントが設営され、警察の鑑識がDNA鑑定を行うブースもあり、避難所に生活とはかけ離れた尋常ではない雰囲気が漂う。トイレも地面に穴を掘りブルーシートで囲んだだけのもので、夜は明かりもない。自衛隊が給水と仮設浴場を設営しているが、ライフラインは復旧しておらず、手洗いもできず、公衆衛生は最悪である。ノロウイルスの蔓延など、劣悪な衛生環境に起因すると考えられる病気が多く見られた。活動拠点は総合体育館(約800人収容)にある救護所と、イスラエル軍の災害派遣医療チームが残したコンテナの仮診療所である。地元の公立志津川病院の医師、徳洲会病院の医師を中心にして、DMAT(災害派遣医療チーム)・東北大学・自治医大・海外からの公衆衛生の専門家など有志の精鋭な医師たちが集結している。私たち日薬チームの業務内容は、調剤(代替調剤を多く含む)・巡回診療・OTC薬の配布・在庫管理・公衆衛生(消毒・駆虫など)・セルフメディケーションの啓発など雑多であり、たいへん多忙であった。

報告書③

日程:平成23年8月17日(水)～8月20日(土) 4日間
活動先:南三陸町避難所・同仮設住宅
宿泊先:南三陸ホテル観洋(宮城県南三陸町)

お盆休みを利用して、有志の医療関係職種と共に3度目の被災地入りをする。避難所(約450人収容)となっているホテルロビーで健康相談ブースを開設す

る。保険診療も再開されているので地元の医療再生の妨げにならないよう受診勧告を主に活動する。相談者の半数は被災者で、あとの半数は長期ボランティア滞在の方々である。この頃になると、山間部への移住で分断されたコミュニティと地域医療プライマリケア、福祉のネットワークがどのように形成されていくのか気に掛かり、仮設住宅へも赴く。この地域は震災前から高齢化がすすみ、特化した医療過疎地である。東北人特有と云われる辛抱強さを考え併せ、高齢者や身体障害者などの災害弱者にも配慮した先進の地域コミュニティケアの建設がまたれる。また被災地のそんな混乱の中、ご本人やご家族が「仮設であっても自宅で最期を」と希望された癌末期患者さんの在宅療養に取り組まれている石巻赤十字病院の医療団の活動を間近で拝見し、心より畏敬の念を抱いた。

被災地から京都に帰って来ても、被災者の方の疲れた表情や、瓦礫と化した町並みの景色が頭から離れません。それに対し私は震災前と変わらない平穏な生活に戻り複雑な気持ちがしたり、意気込んで行った割に、あまりにも大きな災害を前にした無力感に苛まれたりします。またその一方で16年前の阪神・淡路大震災の折、京都府薬剤師会から神戸市長田区の兵庫高校の救護所にボランティア派遣で参加した時のことを懐かしく思い出しました。当時は医薬分業もまだ浸透しておらず、薬剤師はいないよりいた方がましとの雰囲気の中での孤軍奮闘でしたが、16年を経て今回、薬剤師は医師や看護師からまた社会からも認知され必要とされる存在になったことを、あらためて実感して嬉しく感じました。「生き残ってこんなに良くしてもらって私は幸せや」の言葉の返事に困り、「遠くからわざわざ来てくれてありがとう」の言葉に支えられ、ボランティア自粛論のある中、震災後まもなく現場に駆けつける心強い職能団体の支援に何かとお相伴にあずかり励まされながら、心強くして医療の担い手の一員として微力ながら活動できたことを喜んでおります。

時期の異なる三度のボランティアを終え、僭越ながら被災地での活動は、人として相互扶助の精神や、気配りを要する立ち居振る舞いは勿論のこと、私ども薬剤師の知識や日々の業務、スキルの全てを駆使しながらも、考えの及ばぬ災害心理など人の心に思いをはせるホスピタリティを問われている気がしてなりません。日ごろ慣れないコンピュータや調剤機器に囲まれ、不本意ながら薬局経営や雑務に追われ、見失いがちな医療の原点を垣間見ることができ、心が洗われるよき機会を与えていただいた事を感謝しております。

最後になりましたが、今回の東日本大震災を踏まえて、今後いつ起こるかもしれぬ東海・南海地震などの大震災に備えて、災害発生時の地域の医療体制

の整備や、薬剤師の役割に係わる研修の充実、病院薬剤師と開局薬剤師の連携、大学研究機関と薬剤師の連携の推進など、また次世代に繋ぐ医療人・薬学人の育成が、この京都でも今以上に検討され構築されることを切に願っております。

仮設住宅で迎えられる初めての冬の足音がそこまで聞こえています。不条理にも大災害に見舞われた宮城の地にも、桜の花が瓦礫の中に切なく可憐に咲いていました。被災された方々に一日でも早く無事に平穏な心の春が訪れますようにお祈り申し上げます。

2012年度本学大学院 薬学研究科薬学専攻博士課程(4年制)及び 薬科学専攻博士後期課程(3年制)の入学選考結果

2012年度本学大学院薬学研究科薬学専攻博士課程(4年制)および薬科学専攻博士後期課程(3年制)の入学選考を2011年10月29日(土)に実施し、同日合格発表を行いました。志願者数・合格者数等は下表のとおりです。

○2012年度本学大学院薬学研究科薬学専攻博士課程(4年制)入学選考結果

(単位:名)

志願者数	受験者数	合格者数
10	10	10

○2012年度本学大学院薬学研究科薬科学専攻博士後期課程(3年制)入学選考結果

(単位:名)

志願者数	受験者数	合格者数
1	1	1

2012年度推薦入学試験結果

2012年度推薦入学試験の内、指定校制推薦入学試験が2011年11月14日(月)に、一般公募制推薦入学試験は11月19日(土)に実施され、11月29日(火)に合格発表が行なわれました。その結果は次のとおりです。

(単位:名)

	募集人員	志願者数	合格者数
指定校制推薦	50	49	49
一般公募制推薦	80	248	81

異文化体験 フライブルク大学「日本人学生のためのサマープログラム」を受講して

フライブルク大学国際局が主催する「日本人のためのサマープログラムードイツ語とドイツ文化」が本年度も8月8日から31日まで開講された。今年は行事設定の基準となる復活祭が4月下旬にずれ込んだため、夏学期も夏休みも始まるのが遅くなり、そのあおりを受けて例年よりもかなり短い開講となった。本学からは26名+1名（+1名の理由は体験記で）が参加、フライブルク大学の提携校の早稲田大学が本年度から学生の派遣をやめたことから本学はついに参加者数が全国一に躍り出た。

毎年数多くの受講者を派遣する本学のために特別プログラムとして市内の薬局や薬学部の施設そして医学部付属病院の臨床現場の見学が用意されている。本年度は期間が短かったため薬局見学のみとなったが、受講者の半数以上が参加するなど好評だ。また海外研修にはトラブルがつきものだが国際局によるサポート体制も万全で、昼夜を問わず日本人・ドイツ人スタッフが対応する体制がとられており、海外渡航未経験者でも安心して参加できる様々な心遣いがなされている。

このサマープログラムに参加した2年次生の代表+1名に「異文化体験」というテーマでドイツでの体験や思い出を投稿してもらった。これを読んでサマープログラムに興味を持った人は是非とも次の夏休みにチャレンジしてほしい。ドイツでも大学教育を取り巻く財政事情は厳しいが大学の努力により受講料+学生寮費で820ユーロ（2011年と同額）と格安の料金設定になっている。教室での授業は午前中で終了、午後には楽しいレクリエーションプログラムが用意されている。また週末にはダイムラー・ベンツの博物館、フランスやスイスへの日帰りバス旅行(料金は受講料に込み)が予定されている。フライブルクのみならず、黒い森やライン河、スイスやフランスの美しい町や村が皆さんを待っています。

（注：ドイツでは18歳以上の飲酒は合法です）

（ドイツ語担当准教授・日本フライブルク・アルムニ会会員）桑形広司

Freiburg gefällt mir.

2年次生 大前 敬子

私は今年の夏休みに、ドイツのフライブルクに短期留学しました。語学がとにかく好きな私は、大学生の間に留学がしたいと思っていました。そこで、桑形先生からドイツ留学の話を聞き、参加することになりました。

私が習った先生はドイツ語しか話してくれず、最初は授業についていけないことも不安でした。しかし、授業は会話中心だったため、友達と対話練習をしたり、昨日したことを先生に話したりと、ドイツ語を毎日使っているうちに楽しくなってきました。授業では、文法はもちろん、レストラン・アイスクリーム屋さんでの会話、食べ物の名前など、今すぐ使えるドイツ語を教えていただき、とても勉強になりました。授業が終わると、さっそく、アイスクリーム屋さんでドイツ語を使って注文をしました。自分のドイツ語が伝わるのは本当にうれしかったです。し、もっと話せるようになりたいと思いました。

平日の午後はレクリエーションプログラムに参加したり、友達とフライブルクの街を散策したりしていました。レクリエーションプログラムで一番印象に残っているのはラインの滝です。とにかく、ものすごい迫力で圧倒されました。ボートで滝のすぐ近くまで行くことができました。ちょうど滝に虹がきれいに架かっていて、とても美しく、感動しました。

また、ミュンヘン週末旅行にも参加しました。白ソーセージや白ビールなど、ミュンヘンならではの料理を堪能しました。ルートヴィヒ2世が築城した、ノイシュヴァンシュタイン城も見学しました。城内は本当に豪華でした。それぞれの部屋の装飾はバロックやゴシックなど様式も多彩で、とてもおもしろかったです。つり橋から見るノイシュヴァンシュタイン城はとても美しく、感動的でした。

今回のドイツ留学ですばらしい経験をたくさんしました。毎日が充実していて、本当に楽しかったです。たくさんの人にも出会うことができました。街中でもたくさんの人が、「どこから来たの？」などと声をかけてくれました。ドイツの人と会話をするチャンスがたくさんあって、とてもいい勉強になりました。今回の経験を活かし、これからもドイツ語学習に励みたいと思います。ドイツ留学を紹介してくださった桑形先生を始め、ドイツ語を教えてくださいましたCarola Grasse先生、プログラム事務局の方々、チューターの皆さん、ドイツ留学を応援してくれた家族、本当にありがとうございました。



ラインの滝



ミュンヘンのレストランにて

Wir lernen Deutsch im Sommerkurs 2年次生 須藤 悠悟

ジンザラビンバンバ〜ザラドゥザラデン〜♪という意味はわからないが頭に残るそのメロディはRosemarieが「Mの発音練習です!」と言って編み出したオリジナル曲だ。たまにお風呂で鼻歌交じりに歌いそうになり、「ここは日本だ」と自重する。

Rosemarieは僕のクラス担任であり、この先生はとにかく歌う事が好きだった。月曜から金曜の午前中、毎日行われるドイツ語の授業。数字やあいさつなど基本的なことは歌で覚えた。歌で覚えると頭に残りやすいというRosemarieの理論に基づいて授業では毎日歌っていた。もちろん最初から最後までずっと歌っているわけではなく、リスニングや日常会話、食べ物・飲み物・身の回りにあるものの名称などたくさんのドイツ語を対話中心の授業で楽しく学習した。

平日の午後と週末は授業もなく、自分たちで時間を自由に使える。レクリエーションプログラムに参加してスイスやフランスに行ってみたり、ブンデスリーガを観戦したり、フライブルクにある大聖堂(Münster)に登って景色を眺めたりした。動物園にも行った。ビールやワインも飲んだし、ひよこも買った。2泊3日でミュンヘンやノイシュヴァンシュタイン城に行ったことも思い出の1つである。ドイツでの出来事を書き出していったらきりが無いが、とにかく毎日が充実していた。そして何もかもが新鮮だった。日本にいれば毎日起こることは習慣化していて、新鮮さというものは見つけれにくい。ドイツでの生活は新鮮さにあふれていたし、日本との違いを意識する事で自然と視野も広がっていった。

また、このサマープログラムに参加して、たくさんの人との出会いがあった。普段、話をしたこともなかった京薬生、他大学から参加していた人たちとも友達になれた。その中には日本に帰ってから再び会うことができた人もいれば、これから会う予定の人もいる。

寮の近くにあった店のおじさんと仲良くなり、メールアドレス(以下:メルアド)を交換した。紙に書いてもらったのだが、その字が解読不能で、

せっかく交換したメルアドが使えないのは残念だ。そして、相手もこちらのメルアドを知っていながら連絡してこないのもまたなんとも言えない。

Rosemarieと約束した。「またドイツに来ます!」

その約束と先ほどのおじさんの件も含めて、再びドイツに行く事にした。いつか必ず。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった桑形先生、ドイツでサポートしていただいたチューターの方々、スタッフの方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。



Rosemarie先生の家にて



Staufenにて

フライブルクでの夏期講座を終えて 2年次生 不破 徹

まず、ドイツ語の授業では、基礎に始まり、日常生活で使える表現を中心に実際に口に出すことで学んでいました。私の担任はドイツ人の方でしたが、日本語も話すことができ、とても丁寧に授業して下さいました。

また、この滞在中の宿泊施設である学生寮はとても綺麗で、住みやすかったです。朝食も寮の食堂で食べることができ、ホテルと遜色なかったと思います。

このプログラムには授業の他にレクリエーションが付いており、各々が参加したいレクリエーションに参加することが出来るのですが、私が個人的によかったのは、ワイン農家の見学です。ぶどう畑やワイン工場でどのようにワインが作られているかを見学し、何種類かのワインを試飲することができます。私はそこで初めてワインを飲んだのですが、味が濃いものもあれば、甘くて飲みやすいものもあり、飲み比べができてとても楽しかったです。

また、私はサッカーが好きなので、ドイツでも非

常に有名なブンデスリーガの試合を見に行ってきました。生で見る試合は、とても迫力があり応援もかなり熱狂的で、”さすがドイツ”と思いました。

ミュンヘンでの週末旅行では、ディズニーランドの城のモデルにもなっている、ノイシュヴァンシュタイン城をはじめ、自由行動もあるので、ドイツでもとても有名なドイツ博物館に行ってきました。そこは、一日でまわりきれないほど大きく、農業、鉱業、航空工学から、鉄道、機械、宇宙に至るまで、ドイツの科学技術を学び、自分で体験することもできるのであつという間に時間が過ぎていました。

また、他大学の色々な学部 of 学生の人達と共に授業を受けたり、会話し接することで、刺激を受け、物事を別の観点から捉えたり、自分の考え方が少し変わったような気がします。

今回のフライブルクでの約3週間の滞在は本当に有意義で、充実したものであつたと思います。このプログラムで得た貴重な経験を今後の人生に活用し、より充実したものにしていきたいと思います。

次、このプログラムに参加しようとする方は、せつかく3週間も滞在期間があるので、あらかじめドイツでしかできないこと、行けない所を考えておくことをおすすめします。



フライブルク大聖堂をバックに



ブンデスリーガ・フライブルク対マインツ戦

ドイツへ！

2年次生 上野 佳奈美

2011年8月7日。約12時間の空の旅を終えて辿り着いたドイツ。私はこの8月にドイツでの「日本人のためのサマープログラム」に参加し、生のドイツ語にふれてきました。

ドイツでの授業は、A～Jのクラスがあり、1クラス12人ほどに分かれて行われました。授業はほぼドイ

ツ語だけで、コミュニケーションをとる会話の多い授業でした。日本語が使えないので理解しづらく、またうまく伝えられないため、意思疎通が難しく授業についていくのが大変でした。午後にはドイツ文化についての講義もあり、どれも面白く、特にドイツの環境問題への取り組みについての講義が印象深かったです。私たちが訪れたフライブルク市は、発電時の余った熱から温水をつくり各家庭へ配るというコージェネレーションが街全体で行われていたと知りました。

授業は午前の2コマのみで、午後から基本的に自由時間となっていました。午後は用意されたレクリエーションに参加することができ、そのうちのひとつに、サイクリングがありました。綺麗な自然の中を自転車で走りとても気持ちよかったです。その他にも薬局見学、ウォークラリーなどがあり、さらにはパンケーキやドイツ料理も作りました。週末には日帰り旅行が企画されており、フランスやスイスに行くことも出来ました。スイスにあるラインの滝は迫力満点で、必見です。

ドイツでは食事の量が多く、油っぽいものや味が濃いものが多かったです。日本食が恋しくなりましたが、じゃがいもやソーセージ、ビールは有名なだけあつておいしかったです。街並みも綺麗でした。ドイツへ行って、ドイツ語はもちろん、英語の大切さを実感しました。ドイツ語がわからないとき、英語で話そうとするからです。

ドイツに行く前は不安でいっぱいでしたが、いざ行ってみると帰りたくないと思えるほど楽しかったです。本当に行つてよかったと思いました。桑形先生をはじめ、友達、家族、そしてドイツでお世話になった方々、本当にありがとうございました。



クラスにて（筆者：後列右端）



Löwenapothekeにて（筆者：後列左から2人目）

ドイツ親子留学（親）

2年次生 浅見 絃子

桑形先生からドイツ留学の話を伺ったとき、行きたいと思いましたがひとつ問題がありました。私には小3の息子がいるのです。それでも行きたい！と思って桑形先生に相談し、プログラム事務局(JSP)の方と何度か連絡を取っていただいた末に、許可をいただきました。JSPでも初となる親子留学です。

フライブルクはとても素敵な美しい街で、すばらしい体験が出来ました。JSPの方々には細やかな心遣いをしていただき、桑形先生を始め、お世話になった方々にはとても感謝しています。ありがとうございました。思い出がありすぎて、ここには書きつくせないほどです。ですが、フライブルクの思い出は他の方も書かれると思うので、フライブルクに着くまでの体験を書こうと思います。

せっかくドイツに行くのだからフライブルク以外の街も観光しようと思い、6月末に計画を立てました。親子で4日間鉄道の旅です。ドイツ鉄道のHPで電車の時刻を丹念に調べ、移動可能な距離であることを確認してから宿を予約。余裕を持たせつつも綿密？な計画を練って出発しました。それでも切符を買うことに苦労したり、大きすぎたスーツケースが列車内で邪魔になったり…と色々ありましたが、充実した4日間を過ごせました。

きれいな景色を見て、おいしい料理を食べ、珍しい電車に乗って、大満足な旅でしたが、印象に残っている出来事はやはり人とのふれあいです。電車の乗り継ぎ駅で、階段しかなかったとき、通りがかりのおじさんがスーツケースを運んでくれました。ホームの先端近くで電車を待っていたら、そこには電車が止まらないことを私達に教えるために、近くまで来てくださったおばあさんがいました。電車の車内アナウンスが理解できず、行き先が変更になった電車にボーっと座っていた私達に、どの電車に乗り換えるのかという事を私が理解するまで何度も説明してくれた母子連れがいました。

言葉が通じなくても何とかなる、でも言葉が通じたらもっと楽しい。ドイツでも生活できる。そんな風に感じられる体験でした。ドイツに興味を持たれた方がいらっしゃったら、是非、この留学をお勧めします！きっと他ではできない思い出や経験ができると思います。

ドイツ親子留学（子）

浅見 ともあき

ぼくは、この前の夏、お母さんと一緒にドイツに行きました。お母さんが寂しそうにしていたので一緒に行ってあげることにしたんです。本当は不安だ

し、行きたくないとも思いました。だって、お母さんはドイツ語なんかぜんぜん話せへんし、英語だってほとんどわかりません。もちろんぼくも話せません。

ぼくの不安は的中しました。フランクフルトに着いて、フライブルクへは電車で行きます。ぼくは電車大好きです。ドイツの特急ICEに乗るんです！お母さんはガイドブックを持って切符の自販機に向いましたが10分たっても切符は買えませんでした。「ガイドブックと全然違うやん！」と言って怒ってました。ぼくはICEに乗れないんじゃないか、このまま迷子になるんじゃないかと不安になって泣きそうになりました。「ママ、誰かに聞こうよ」とぼくが言うと、ママはぶつぶつ文句を言いながら駅員さんのいる窓口に向かいました。窓口には少し人が並んでたけど、順番が来たらすぐに切符が買えました。こんなんでも3週間大丈夫なんかなあと心配になりました。

フライブルク駅に着くと、JSPの人が迎えに来てくれました。日本人のお姉さんだったので、ぼくはほっとしました。地面は石がうめこんであって、スーツケースがガタガタいって楽しいです。お店屋さんの前には、石で模様が描いてあって面白いです。上を見るとききれいな看板が飾ってあって、映画の中みたいでした。トラムもいっぱい走ってるし、ぼくはフライブルクの街が大好きになりました。

大学生の友達がいっぱいできました。ドイツ人の友達もできました。お母さんはビールをおいしそうに飲んでいて機嫌が良かったし、アイスもおいしかったです。ぼくはカーリーブルスとポメスが気に入りました。とても楽しかったです。また行きたいです。



シュテファニー先生とケルン先生



ノイシュバンシュタイン城

ドイツで感じたこと

2年次生 谷口 恵香

ドイツは、少し日本と似た国です。国土の広さや人口密度にも諸外国と比べるとさほどの差はありませんし、ドイツ語講師の先生やドイツ人の学生さんとの共同寮生活で感じられた真面目で堅実な国民性はいずれの国にも共通していると言えるでしょう。一方で異なる点も存在します。言語や文化は勿論のこと、日本とは比べ物にならない高い環境保護への意識や、隣接国を持たない島国にはない移民への価値観。そして、ドイツの人に比べると日本人は消極的なようです。フライブルク大学での授業で私たち日本人学生があまりにも喋らないので、ドイツ人の先生が「日本人はシャイ過ぎる！」と呆れていました。

例えば電車のコンパートメントで隣に座った人と会話をしたとき、彼らは決まって「どこからきたの？」と聞きます。私たちがそれに「日本から来ました」と答えると、「オー、ヤーパン！オーケーオーケー！」となぜかとても喜んでくれました。もしかすると、私たちが思っている以上に日本という国は好かれているのかもしれない、と気付かされたのはこの時です。こんなこと、外国、それも親日の国に行ってみないと分からないことでした。

写真は、ドイツのある土産物屋で撮ったものです。カタカナでランチョンマットと書かれています。もう一度言いますが、これはドイツで撮ったものです。日本語を話す人は日本人だけなのだから、ドイツ国内での使用言語の中での日本語の占める割合というのは極端に少ないはずなのに、数ある言語の中から日本語を選んで書いてくれた事が嬉しくて、つい写真を撮ってしまったのです。このサマープログラムを通じてドイツの言語や様々な文化に触れ、私はドイツのことが大好きになりました。それと同時に、外国から見た日本というものを見直すことができ、そして自分の国のことが一段と好きになりました。



日本語を見つけました！

Freiburgでの充実した3週間

2年次生 内藤 千尋

フランクフルト空港に着くと夕方でした。夕食の時間でお腹も空いていたので何か食べようと探したものの、レストランに入る勇気もなく、パンを買うことにしました。とりあえず指をさしてパンを選び、とりあえずお金を出したけれど、レシートの読み方もわからず、正しいお釣りをもらえたのかさえもよくわからない。そんなところから私のドイツ滞在は始まりました。

平日の午前中はドイツ語の授業を受けます。先生は日本語を話せず、ドイツ語か英語しかしゃべってくれません。最初はプログラムの終わりまでついていけないのだろうかと不安もありました。しかし、先生がゆっくりと話して下さったこともあり、毎日聞いているうちに少しは理解できるようになりました。授業を受けることにより、街の看板の意味がわかるようになったり実際にフレーズを使うことができるようになったりするの、留学ならではのことであり、授業に対する意識も変わってきます。また、先生はジェスチャーを使って説明して下さるので、いちいち日本語に直して理解するのではなく、ドイツ語のまま吸収していくことができました。当たり前ですが、日本語は通じないので、ドイツ語や英語が現地の人とコミュニケーションをとる上で必要になります。いろいろな人と接する中で、言語を勉強することの意義をあらためて実感できたように思います。

3週間滞在したフライブルクは中心に大聖堂や大学、飲食店や雑貨店が集まっています。平日でも道でクラリネットやバイオリンなど楽器を演奏している人、カフェでお茶をしている夫婦、お昼からビールを飲みながらゆったりとしている人を多く見かけました。私は日本で日々あわただしく暮らしていましたが、ドイツ人のように、ちょっとした楽しみを入れられる心の余裕を持って暮らすことも大切だと感じました。

また、大聖堂で毎週火曜日に開かれるパイプオルガンのコンサートは特に気に入って、滞在中に2度も行ってしまいました。パイプオルガンの多彩な音色、大聖堂に響き渡る音楽を他の多くの人々と共有でき、本当に素敵な時間を過ごすことができたと思います。

プログラムを紹介して下さった桑形先生にはとても感謝しています。また、この3週間でドイツ語の先生Carola、チューターさん、クラスの皆をはじめ多くの人と出会い、たくさんの貴重な経験をすることができたことは私の一生の宝物です。いつかまたフライブルクを訪れられる日が来ますように！



ドイツの民族衣装

パイプオルガンコンサート
(大聖堂にて)

レーマン先生生家 町の文化財へ

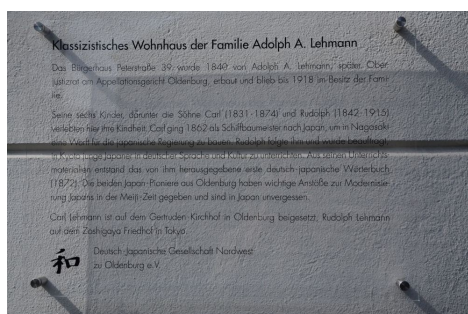
桑形 広司

本学創立の恩人であるルドルフ・レーマン先生の生家がこの度地元オルデンプルク市の独日協会により、日本の近代化に貢献した同市出身者の関係施設として認定を受けた旨、レーマン先生のひ孫にあたるヘニング・レーマン氏より連絡があったので報告したい。

2011年は、奇しくも同先生の出身地と同名のオルデンプルク伯爵を代表とするプロイセン王国使節団が来日して結ばれた日独修好条約（1861年）が発効して150年となる記念の年で、記念事業が日独両国で進行中である。先生の生家の顕彰もその記念事業の一つである。4月8日に生家に設置された記念プレートの除幕式が在ハンブルク総領事館の矢加部裕之領事臨席のもと開催され、オルデンプルク市の文書館ではレーマン家が所有する日独関係の文物の展示会が開催された。



除幕式（左がレーマン氏）



銘板

(銘板ドイツ語)

Klassizitisches Wohnhaus der Familie Adolph A. Lehmann

Das Bürgerhaus Peterstraße 39 wurde 1840 von Adolph A. Lehmann, später Oberjustizrat am Appellationsgericht Oldenburg, erbaut und blieb bis 1918 im Besitz der Familie.

Seine sechs Kinder, darunter die Söhne Carl (1831-1874) und Rudolph (1842-1915) verlebten hier ihre Kindheit. Carl ging 1862 als Schiffbaumeister nach Japan, um in Nagasaki eine Werft für die japanische Regierung zu bauen. Rudolph folgte ihm und wurde beauftragt, in Kyoto junge Japaner in deutscher Sprache und Kultur zu unterrichten. Aus seinen Unterrichtsmaterialien entstand das von ihm herausgegebene erste deutsch-japanische Wörterbuch (1872). Die beiden Japan-Pioniere aus Oldenburg haben wichtige Anstöße zur Modernisierung Japans in der Meiji-Zeit gegeben und sind in Japan unvergessen.

Carl Lehmann ist auf dem Gertruden-Kirchhof in Oldenburg beigesetzt. Rudolph Lehmann auf dem Zoshigaya-Friedhof in Tokyo.

和 Deutsch-Japanische Gesellschaft Nord-westen zu Oldenburg e.V.

(日本語訳)

アドルフ・A・レーマン家の新古典主義風民家

ペーター通り39番地に位置するこの民家は1840年にアドルフ・A・レーマン（後にオルデンプルク市控訴裁判所上級法律顧問官）が建て、1918年まで同家の所有にあった。

彼の6人の子供のうちカール（1831-1874）とルドルフ（1842-1915）はこの家屋にて子供時代を過ごした。造船技術者であったカールは1862年に日本に向かい、長崎にて日本国政府のために造船所を建設した。ルドルフも兄の後を追って日本に向かい、京都で日本人の若者にドイツ語とドイツ文化を教授するように要請された。彼の使った教材の中から彼自身の手による初めての独和辞典が1872年に刊行された。オルデンプルク出身の二人の日独交流の先駆者は明治時代に日本の近代化のための重要なきっかけづくりを果たし、長く日本人の記憶にとどめられている。

カール・レーマンはオルデンプルクのゲルトルーデン墓地に、ルドルフ・レーマンは東京の雑司ヶ谷墓地にそれぞれ埋葬されている。

オルデンプルク北西ドイツ・日本協会

訳者注)

「…京都で日本人の若者にドイツ語とドイツ文化を教授することを要請された」という箇所の「若者」こそ京都薬科大学の前身である京都私立独逸学校の設立者である。

奏 楽 館 完 成



2011年4月、三条通に面したグラウンドの木漏れ日の中に、鉄筋コンクリート2階建の、奏楽館が完成しました。奏楽館は、1階に3つの練習室、2階に2つの練習室と共同練習室を備えた音楽系クラブの練習施設です。ここでは、これまで別々の場所で練習をしていた、管弦楽部・マンドリン部・ユーベルコール部と、100人を超える大所帯の軽音楽部が、共同で利用することになります。

このことで、今まで以上に、音楽系クラブ同士の交流が深まり、豊かな人間関係が育まれることを期待しています。そして、それらを実現する為に、それぞれの練習室をつなぐ吹き抜けのホールには、ガラスブロックの壁面を通して木漏れ日を取り込み、落ちついた談話スペースとしています。

また、近隣の住環境に配慮して、練習室は防音を図っています。このことにより、周りに気兼ねすることなく、練習に専念できる施設としています。この施設の利用を通して、充実した学生生活の思い出が、それぞれの心の中に刻まれていくことを期待しています。

■整備内容

建物延床面積	419㎡
建物構造	鉄筋コンクリート造
着工年月日	2010年11月26日
竣工年月日	2011年 4月30日
設計・監理	株式会社 類設計室
施工	株式会社 大林組



三条通より



練習風景

グラウンドの南側に薬用植物補助園 完成

□ 設計コンセプト

本学グラウンドの南側に位置する女子寮跡地に、学生の実習の場としては勿論のこと、近隣住民への開放も見据えた薬用植物補助園の整備が完成しました。

単なる陳列型の見本園ではなく、本校の「顔」となるとともに、地域の方々にも親しまれる空間となるよう、景観的にも配慮しました。ゆったりと景色を楽しみながら散策、休息することができ、学生にも身近に感じられる、薬用植物補助園としての整備を今後とも行っていきます。（今後、畝作り、株分け、植え替え等を行い、多種多様な薬効のある樹木・薬草を植栽していきます。その様子は改めて本誌にて報告いたします）

□ 整備概要

面積	2,700㎡
主要施設	・屋外便所・倉庫（RC造+木造29.26㎡）1棟 ・休憩所（木造4.86㎡）1棟 ・庭園ゾーン 1式 ・薬草展示ゾーン 1式
着工年月日	2011年7月15日
竣工年月日	2011年10月31日
設計・監理	株式会社 空間創研
施工	株式会社 大林組

□ 池（水生植物栽培地）

池の中心にある石は、本校地で使用していた井戸の井筒を再利用しています。

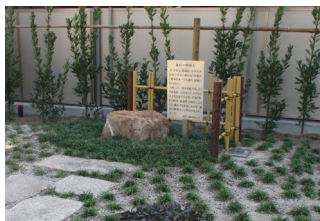


□ 庭園ゾーン

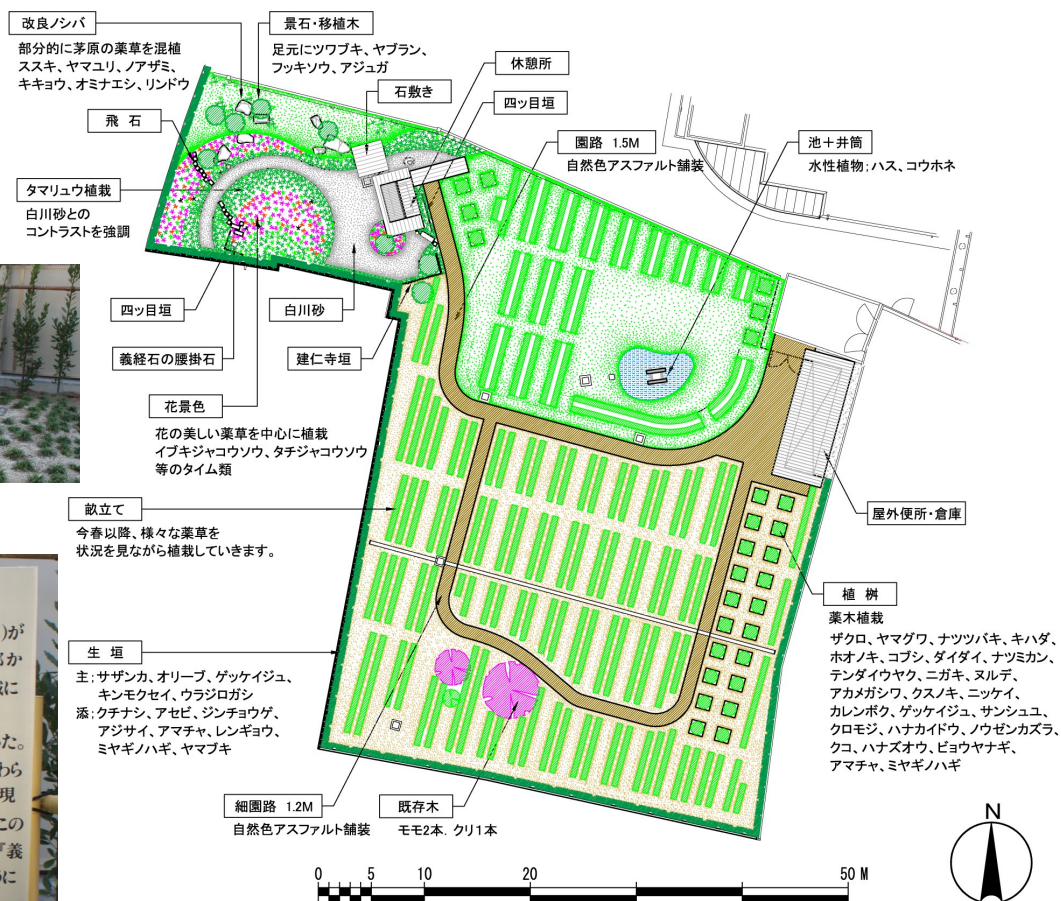
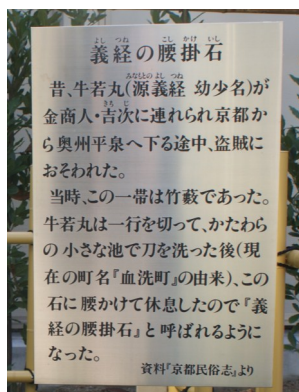
「義経の腰掛石」を中心に、既存の樹木・石材と花の美しいタイム類の植栽による庭園的な空間の整備を行っています。



□ 義経の腰掛石



□ 案内版



バイオサイエンス研究センター 着工



本校地にある現動物研究センターを南校地に建て替えます。南校地の正門前の南校舎を11月より解体撤去し、来年3月より新しい動物研究センターである「バイオサイエンス研究センター」の建設工事に着手します。今回はその「バイオサイエンス研究センター」の設計内容をご紹介します。

薬系大学において

最高水準の動物実験センターをめざす

南校地に国内の薬系大学における動物実験研究施設として、規模・設備・内容共に最高水準を目指した「バイオサイエンス研究センター」を建築します。

南校地キャンパスの顔となる施設づくり

計画敷地は南校地のエントランスにあたる場所となります。建物形状をL型とし、正門前に大きなエントランスコートをつくりだし、学生・教員や来学の方々を気持ちよく迎え入れます。南校地の持つ「静けさ」や「落ち着いた」雰囲気を継承しながら、新たな時代の顔となる魅力あるファサードとしています。

周辺環境に配慮した施設配置

住宅に囲まれた本敷地であるため、周辺の方々に充分配慮し計画しました。西側住宅との距離を充分

に確保し、緑豊かな既存樹木を充分活かし、近隣住民の方々に潤いを感じていただける空間としています。また、高さにも配慮し、現南校舎の4階建に対して、本施設は3階建に抑えるなど、建物を大きく見せない、周辺環境に充分配慮した計画としています。

バイオサイエンス研究センターとしての

主な留意事項

- 高機能：衛生的で安全性が高く、先端的研究にふさわしい高機能で高品質の動物実験研究施設
- 長寿命：研究実験内容の変化・通年稼働しながら機能更新に対応できる施設
- 快適性：知の創造拠点にふさわしい衛生的な空間づくり
- 環境配慮：地球環境・地域環境に配慮し、キャンパス景観の向上に資する環境調和型施設
- 高効率：費用対効果の高い施設づくり

施設最大の特徴はSPF※¹動物を扱う施設で、このSPF実験・飼育ゾーンは1つのフロア（2階）にまとめるなど、明確かつ高機能で高品質の研究施設づくりを行っています。

衛生管理に充分配慮したゾーニング計画

SPF実験室・飼育室機能を1フロアに集約し、清潔管理の徹底を図っています。実験室と飼育室が同一階にあるため、研究者にとって効率的かつ安全・安心な研究・実験施設を実現します。

24時間保守点検が可能なISS方式の採用

各実験室・飼育室上部には24時間保守点検、バックアップが可能なISS※2を確保しています。

人・動物・飼育・物品・廃棄物の動線を明確に分離

各種動線を明確に分離し、かつ空気の流れも考慮し、清浄区域と汚染区域を厳格に区分し、動物や人の健康維持に努め、動物実験の高い精度を保てる安全安心な施設構成を行っています。

安全性を重視した建物計画

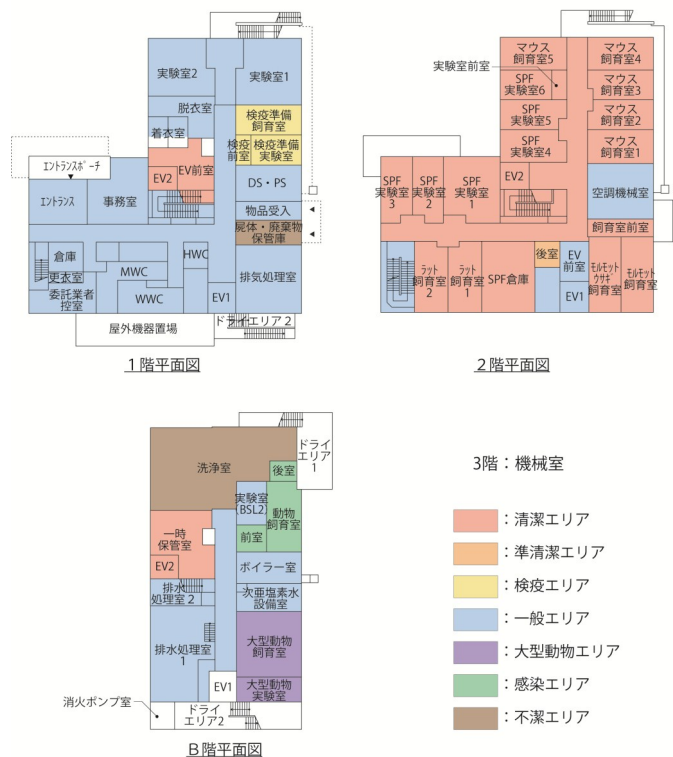
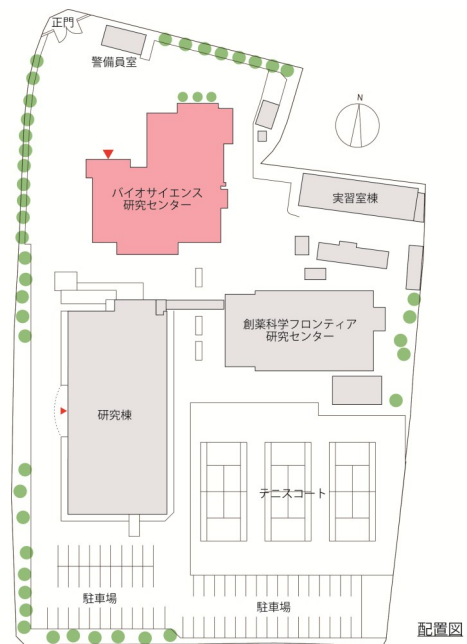
動物実験施設として、セキュリティの高い施設づくりを行っています。施設導入部・各ゾーン導入部・各室出入口でアクセスコントロールを行い、利用者の分類・目的に応じたセキュリティのレベルを設定できるように配慮しています。動物飼育実験室は清浄クラス毎に区画を行い、各々の動物に適した室内環境を実現します。

研究者に優しい環境計画

臭気拡散防止策として、光触媒による脱臭装置等の措置を行っています。各室の温度、湿度、陰陽性、照明の監視制御は、事務室に集約しています。設備系の異常に迅速に対応でき、メンテナンスを効率良く行うことが可能です。

ノンストップ対応

動物飼育室は、通年24時間稼働施設となるため、本格稼働してからのシステム停止や変更は研究活動に大きな支障となります。ISSを設ける等各種トラブルにも安心して運用できる様々なバックアップシステムを設けています。



※1 SPF : specific pathogen free / 特定病原微生物を持たない状態

※2 ISS : interstitial space / 天井階（設備点検スペース）

建築概要

建築面積：781.19m²

延床面積：2,503.89m²

規模・構造：地下1階地上3階・鉄筋コンクリート造

南校舎解体撤去工事：2011年11月～2012年3月

バイオサイエンス研究センター新築工事：2012年3月～2013年6月

設計・監理：株式会社 東畑建築事務所

施工：株式会社 大林組

2011年度後期試験日程

教務課

シラバスにも一部掲載されているように、2011年度後期の試験日程は別表のとおりです。

再試験受験手続が遅れる学生が、例年見受けられます。日程等（再試験手続の詳細は後日掲示で連絡します）よく確認しておいてください。

「再試験受験許可書・領収書」については、再試験を受験する際に必要です。手続後、再試験受験時まで紛失しないよう大切に保管してください。万が一紛失した場合は、教務課で再発行をしますので申し出てください。

《後期試験等日程表》

年次	試 験	試験期間	合格発表	受験手続日
4	後期試験	1月12日(木)～ 1月18日(水)	1月27日(金)17:00～ 2月 9日(木)24:00 Webによる公開	—
	後期再試験	2月 6日(月)～ 2月 9日(木)	2月16日(木)17:00～ 2月23日(木)24:00 Webによる公開	1/30(月)・1/31(火)
	前・後期再試験Ⅱ	2月23日(木)～ 3月 1日(木)	進級査定会[3/22(木)] まで発表しません。	2/17(金)・2/20(月)
	OSCE本試験	12月17日(土) 12月18日(日)	別途告知	—
	OSCE追・再試験	3月 8日(木)	進級査定会[3/22(木)] まで発表しません	別途告知
	CBT本試験	1月24日(火) 1月25日(水)	別途告知	—
	CBT追・再試験	3月 5日(月)	進級査定会[3/22(木)] まで発表しません	別途告知
1～3	後期試験	1月20日(金)～ 1月30日(月)	2月13日(月)17:00～ 2月23日(木)24:00 Webによる公開	—
	後期再試験	2月23日(木)～ 3月 1日(木)	進級査定会[3/22(木)] まで発表しません	2/14(火)・2/15(水)

Library News

図 書 館

開 館 日 程

2012年 1月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2012年 2月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29			

2012年3月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

休 館
9 : 00-20 : 00
9 : 00-17 : 00
10 : 00-17 : 00
休 館=館内整備

テーマ展示

第8弾は、「災害- その脅威と戦う」をテーマに災害について展示します。東日本大震災から約1年。今だからこそ、「もしも…」の状況を一人一人が考える時。災害の基本知識や防災対策に関する資料を集めました。展示期間は、1月から3月末までです。 展示中の資料はパンフレットを除き、貸出可能です。

教育後援会からのお知らせ

2011年度の教育後援会定例総会が、10月7日（金）13時30分よりA31講義室に於いて開催されました。

宮秋会長から「学生のため、大学のためにどうしたらよいか、前向きかつ活発な意見を出してほしい」との挨拶があり、武田理事長、乾学長からはパワーポイントを用いた大学の近況等について説明が行われました。

その後議事に移り、2010年度の決算報告に続き2011年度事業計画ならびに予算（2011年10月1日～2012年9月30日）が下記のとおり承認されました。また、宮秋会長の今期限りの退任および福田副会長の会長就任についても併せて承認されました。なお、宮秋会長は1997年から本年まで14年間の長きにわたり、教育後援会ならびに本学の発展に尽力されましたので、その功績に対し乾学長から感謝状が贈呈されました。

その後、進路支援部長の安井教授から「学生への進路支援」について説明が行われ、最後に長澤副会長より閉会の挨拶があり終了しました。

（単位：円）

項 目	予 算 額	使 徒
学生生活支援事業	1,440,000	学生教育研究災害傷害保険料補助（6年間分）
	200,000	保険適用外初診料補助（上記保険適用外の初回治療費を補助）
	1,000,000	学生補助金（学生自治会の意見を聴取、要望に対して柔軟に補助）
	150,000	弔慰金（学生及びそのご父母に対して支給）
	1,500,000	学部生課外講座受講料補助（学部生を対象に、学内で開講する英語課外講座等の受講料の一部、1人当たり15千円を限度に補助）
	200,000	一般図書の寄贈（専門図書を除く）
	500,000	卒業祝賀会への協賛（京薬会主催）
	952,000	卒業記念品の贈呈
小 計	5,942,000	
父母対象事業	300,000	会合費・事務費・郵送料
	1,500,000	KPU _{NEWS} 送料
小 計	1,800,000	
研究教育支援事業	340,000	CBT模擬試験料（2011年度4年次生に対する継続事業）
	2,100,000	「治療薬マニュアル」 2012年度の4年次生用 参考書代
	246,560	国家試験対策模擬試験 解説講義料
	608,400	インターネットを利用した自己学習支援システム使用料
小 計	3,294,960	
予備費	350,000	
支出合計	11,386,960	

第97回薬剤師国家試験

第97回薬剤師国家試験は、次のとおり実施されます。

試験期日 2012（平成24）年3月3日（土）・3月4日（日）

試験地 北海道 宮城県 東京都 石川県 愛知県 大阪府 広島県 徳島県 福岡県

試験科目 [必須問題試験]

物理・化学・生物、衛生、薬理、薬剤、病態・薬物治療、法規・制度・倫理、実務

[一般問題試験]

・薬学理論問題試験

物理・化学・生物、衛生、薬理、薬剤、病態・薬物治療、法規・制度・倫理

・薬学実践問題試験

物理・化学・生物、衛生、薬理、薬剤、病態・薬物治療、法規・制度・倫理、実務

合格発表 2012（平成24）年3月30日（金）午後2時

11月のオープンキャンパス開催

入試課

11月6日（日）にオープンキャンパスを開催しました。

一時小雨の降るあいにくの天候となりましたが、241名の参加者があり、盛会裏に終えることができました。

半日のスケジュールで、躬行館のT31講義室での「学長挨拶」、「大学紹介」、「在学生の話」、「卒業生の話」の後、「施設見学」、「相談会」を実施しました。

「在学生の話」では、6年次生の杉本紗梨さんにクラブ活動や分野での研究、病院・薬局実習などのご自身の体験をお話していただきました。「卒業生の話」では、京都桂病院医務部薬剤科に勤務されている田中晶子先生をお招きして、本学の魅力や本学に在籍することのメリット、病院での薬剤師の仕事などをわかりやすくお話いただきました。「在学生の話」、

「卒業生の話」ともにたいへん好評でした。

「施設見学」では、臨床薬学教育研究センターおよび躬行館の分野、図書館の見学を行いました。参加者からは、「施設が充実していてきれいだった」、「説明が丁寧でよくわかった」などの感想をいただきました。

「相談会」は、本学の職員と在学生在が相談員となり、前年を上回る97名の相談者がありました。相談内容は、入学試験や進路、奨学金、学生生活などで、高校生、付添者ともにとても熱心な姿が印象的でした。

今後とも、高校生や保護者の方々に本学の素晴らしい教育・研究環境を更に知って戴くためにオープンキャンパスをより一層充実していきます。



学長挨拶



在学生の話



施設見学



相談会

クラブだより

日韓戦

剣道部 4年次生 鶴田 弘明

私は、9月25日にソウルで開催された平成23年度日韓交流親善試合に、関西代表として出場しました。結果は日本が二戦二敗、個人的にも日本の勝利に貢献することができず、悔しい気持ちでいっぱいです。同時に、応援していただいていた方々の期待に応えることができなかったことに対して、大変申し訳なく思います。

帰国後、多くの方から「韓国は剣道が強いのか？」という質問を受けました。シンプルな質問ですが、私には非常に難しい質問に聞こえました。試合では韓国に負けました。しかし、「剣道が強い」という意味そのものに日本と韓国ではギャップがあるように感じます。日本の剣道は伝統のある「武道」であり、私たちは礼儀作法や姿勢、相手を尊重する精神など、試合で勝つ以上に大切なことを先に学んできました。そのため、試合で勝てる剣道が必ずしも強い剣道とは限りません。これは武道特有の考え方だと思います。一方韓国は、剣道をおそらく「スポーツ」と捉えています。とにかく相手を打つことに執着する姿勢、礼儀作法の悪さなどを目の当たりにしてそのように感じました。つまり韓国では、上手に相手に竹刀を当てるのが強い剣道とされているのだと思います。こういったことが日本と韓国との有効打突の判定の微妙な違いにも表れており、私たち日本人選手はそれに苦しめられました。しかしながら、試合中の多少のずるさや技など「スポーツ」としての面が試合で勝つために必要な要素であるのも事実です。韓国人選手のフィジカル面の強さや中間の間合いの強さなどは、私たちにも参考になりました。

伝統のある「武道」としての剣道を守る日本と、「スポーツ」としての剣道を促す韓国。この違いは日本人と韓国人の気質や文化・風習の違いをよく表していると感じます。試合で勝利して、日本の武道の強さを示すことができなかったことを非常に残念に思います。

いつか雪辱を果たすためにも、これからも剣道を続けていきたいと思います。

是非、応援よろしくお願いします。

試合結果

男子第一試合

勝利国

関西選抜(日本)	3(6) - 7(14)	韓国選抜	韓国
----------	--------------	------	----

男子第二試合

関西選抜(日本)	6(11) - 6(15)	韓国選抜	韓国
----------	---------------	------	----

女子第一試合

関西選抜(日本)	3(6) - 0(1)	韓国選抜	日本
----------	-------------	------	----

女子第二試合

関西選抜(日本)	0(2) - 2(5)	韓国選抜	韓国
----------	-------------	------	----

※数字は勝者数。()内の数字は取得本数。



関西選抜の4年次生。国立民俗博物館にて
(筆者：右から3番目)

陸上競技部

活動実績

- ・全日本薬学部対抗陸上競技大会 (全10大学中)
男女総合3位、女子総合3位、女子トラック2位
《男子》400m: 3位 川端崇義
110mH: 3位 川端崇義
800m: 3位 川端崇義
走り幅跳び: 2位 川端崇義
4×400mR: 2位 (木村・川端・宮上・新開)
《女子》100m: 1位 海川和
200m: 2位 海川和
100mH: 1位 田中千尋
走り幅跳び: 1位 田中千尋・2位 海川和
- ・関西薬学部対抗陸上競技大会 (全6大学中)
男女総合2位、男子トラック3位、女子総合優勝、
女子トラック1位、女子フィールド3位
《男子》400m: 3位 川端崇義
4×100mR: 3位 (木村・川端・新開・中村)
4×400mR: 2位 (中村・川端・宮上・新開)
《女子》100m: 2位 海川和・3位 田中千尋
200m: 2位 海川和・3位 富永真央
800m: 1位 富永真央
3000m: 1位 富永真央
走り高跳び: 2位 田中千尋
走り幅跳び: 2位 田中千尋・3位 海川和
4×100mR: 1位 (増川・田中・富永・海川)
- ・関西医歯薬学生対抗陸上競技大会 (全33大学中)
女子総合2位、女子トラック優勝
《男子》110mH: 2位 川端崇義
400mH: 1位 川端崇義
《女子》100m: 2位 海川和
200m: 2位 海川和
800m: 2位 富永真央
走り高跳び: 2位 田中千尋
走り幅跳び: 2位 田中千尋
槍投げ: 2位 富永真央

今後の予定

- ・来年度の全日本薬学部対抗陸上競技大会、全日本医歯薬獣医学部対抗陸上競技大会、関西薬学部対抗陸上競技大会、関西医歯薬学生対抗陸上競技大会に出場予定。

バドミントン部

バドミントン部の活動予定と成績です。

～年間の予定～

4月：京都リーグ（団体）

5月：四葉戦

8月：関西薬学生バドミントン大会

10月：医歯薬戦

11月：京都リーグ（個人）

～成績～

・関西薬学生バドミントン大会

女子：団体戦優勝、女子個人戦ダブルス準優勝、
シングルス3位

・医歯薬戦

男子：3部リーグ3位

女子：2部リーグ2位

卓球部

主な大会記録

秋の四葉

女子団体戦、準優勝

男子ダブルス、ベスト4

女子ダブルス、ベスト4

女子シングルス、3位

春の四葉

男子団体戦、ベスト4

女子団体戦、ベスト4

男子ダブルス、優勝

女子ダブルス、優勝

現在卓球部は男子5人女子10人で活動を行っています。初心者から経験者まで幅広い経験差の中で一人一人が納得でき、楽しく充実した部活動ができる用に日々努力しています。上記の大会に加えて、夏の全薬、春の西日本医歯薬でいい成績が修められるように頑張っています。練習は毎日の昼練に加えて週二回の夕練を行っています。冬の駅伝などにも積極的に参加し、それに向けて疎水を走っています。日頃お世話になっている疎水のゴミ拾いも行っています。

京都学生祭典報告書

こんにちは。

京都薬科大学で活動しているおどりサークル、『京炎 そでふれ！京躍華』です。

今回私たちは2011年10月9日（日）に行われました“第九回京都学生祭典・全国おどりコンテスト”において121団体中、準優勝をいただくことができました。

「京炎 そでふれ！」とは、「新しい学生文化を全国・世界へ発信する」というコンセプトのもと始まった、京都学生祭典より生まれたオリジナル創作

おどりです。どんなおどりかと言いますと「京都らしい 曲・振り・衣装をもとに 四竹という鳴りものを手に持って踊る“おどり”」です。

今回私たちは、この「曲・振り・衣装」すべてを一から自分たちの手で作成した、京躍華2011年度オリジナル作品『逢（あい）』でこの賞を受賞することができました。

この作品は、かつてここ山科に存在していた京都の玄関口である「逢坂の関」を題材に、出逢いの大切さ、ありがたさをテーマにした作品となっています。

この作品ができたきっかけには、私たちの今年度のチームコンセプトである「感謝し感謝されるチーム～ENで笑顔を咲かせましょう～」がもとになっています。このコンセプトには「京躍華での活動を通して感謝の気持ちを学ぼう」「当たり前のことを当たり前だと思わずにしっかりと感謝の気持ちをもって『ありがとう！』と言えるようになろう」そして「全てのEN（縁、円、宴、炎、Enjoy…）で自分たちや、私たちを見てくださるお客さんたちに笑顔の花を咲かせよう！」という思いが込められています。

この賞はメンバーの想いが本当に一つになれたからこそそいだけた賞だと思っています。

私たちはこの賞に満足することなく、さらなる高みを目指して今後も活動していきます。

どこかで『京炎 そでふれ！京躍華』を見かけたら是非足を止めて私たちの演舞を見てみてください。笑顔の花を咲かせて見せます！！

躍動・躍進京躍華！これからもよろしくお祈りします。



京葉祭2011を終えて

京葉祭が終わりほっとしている反面、何か物足りない思いを抱きながらこの原稿を書いています。

後期が始まってから京葉祭が終わるまでの約2ヶ月間、毎日夜8時に集まり、実行委員80人と過ごしていたことを考えると、一人で過ごしている夜が本当にさみしく感じられます。

振り返れば、私が実行委員会に入ろうと思ったきっかけは、「全力で何かに取り組みたい」と思ったからです。高校の時の私は今とは違い、文化祭と言われても積極的に参加せず、むしろ早く終わって休みになって欲しいと思っていたほどです。何をしてもほどほどにこなし、全力で取り組んだ事柄がほとんどなかったのも、大学へ入学して高校時代を振り返ったときに「自分は何をしていたのだろうか?」と考えるようになりました。考えたところで何か出てくるわけでもなく、ただ後悔の念だけが頭に残っていました。大学生になると自分の時間もでき、様々なことに挑戦できるので、高校の時の後悔を払拭するためにも「全力で頑張れるようなことがしたい!」という想いで実行委員会に入ることに決めました。

1年次生の時から今年の京葉祭が終わるまでの約2年半、実行委員として活動してきましたが、高校までは全く頑張ることができなかったのに、最後の学園祭を終えたとき涙がでるほどうれしいと思えた自分を誇らしく思います。私だけでなく、同じ学年のメンバーも多くの方が涙しており、その姿を見るたびに「実行」に所属していてよかったと心から思うことができます。

そして、京葉祭を終えてから「お前が実行委員長でよかった」「先輩が実行委員長でよかったです」と同級生だけでなく後輩にも言ってもらえることが何よりも嬉しい事でした。

学園祭を作るだけでなく、様々な人と関わり、協力し、互いに高め合い、京葉生として人としての大きな自分を作り上げていくことができる、という所に『実行』の醍醐味があると思います。

私自身、大学に入学してから3度目の京葉祭を迎えるまでに数え切れないほど多くの人と出会い、関わり、そのたびに何か少しずつ変わっていく自分を感じていました。

次の京葉祭のためすでに動き回っているであろう実行委員の後輩達も、京葉祭を終えたとき「全力でやってやった!」と心から思えるよう、1年間頑張っで活動に励んでもらいたいと心から願っています。

最後になりましたが、2011年度京葉祭の開催にあたり、ご理解、ご協力を頂きましたすべての関係者、近隣住民の皆様に深く感謝すると共に厚く御礼申し上げます。

2011年度京葉祭実行委員長 福田 智哉



学園祭テーマ



2011年度幹部



中庭の様子

2011年度動物慰霊祭

11月2日(水)午後2時から動物慰霊祭を、学内の慰霊碑前において執り行いました。

当日は、当麻寺の増田宗雄住職をお迎えし、慰霊碑前で読経をいただきました。

当日は、お天気に恵まれ、武田理事長、乾学長、山本動物研究センター長をはじめ職員、また大変多くの学生が次々と焼香をし、日頃教育・研究に貢献をした多くの動物達に感謝と慰霊の念をこめ、冥福を祈りました。

KPUシンポジウム報告書

9月16日（金）、京都薬科大学愛学ホールにおいて第1回KPUシンポジウムを開催いたしました。特別講演として乾賢一学長と京都大学理学研究科の藤吉好則教授に、また一般講演として藤室雅弘教授、赤路健一教授、辻本雅之講師に、さらに学生講演として本学大学院博士後期課程2年次生の安田仁氏および林直樹氏に発表いただきました。参加者は、学部1年次生から6年次生、大学院博士前期課程1年次生および2年次生、博士後期課程1年次生から3年次生、博士研究員から教員までの337名と、非常に大勢の方にご参加いただきました。それぞれの発表に対して、大学研究生を含めた聴衆から多くの質問がなされ活発な議論が行われました。また講演者と聴衆（特に学生）

との距離を縮める目的で、シンポジウム終了後に交流会（茶話会）を設けましたところ、多くの学部学生が藤吉先生、乾学長と講演内容に関して長時間にわたり議論しておりました。今回のKPUシンポジウムに参加することで学生が研究に関する刺激を受けてくれたのではないかと期待しています。今後、定期的にKPUシンポジウムを企画・開催することにより、学部学生・大学院学生が研究に触れて感じる機会を多くしていきたいと考えております。

最後になりましたが、交流会の運営費をご援助いただきました理事長はじめ教職員の皆様に感謝申し上げます。

KPUシンポジウム実行委員会一同

～プログラム～

特別講演(1) 薬物トランスポータに魅せられて—from Bench to Bedside— 乾 賢一 学長（京都薬科大学）

特別講演(2) 構造に指南された創薬を目指す構造生理学の現状と展望

—遠くを見ると研究は楽しい—

藤吉好則 教授(京都大学・生物物理学教室)

一般講演(1) がんウイルスの生存戦略と人間のウイルス制圧戦略

—カポジ肉腫関連ヘルペスウイルスと抗腫瘍療法—

藤室雅弘 教授(京都薬科大学・細胞生物学分野)

一般講演(2) 構造解析に基づくプロテアーゼ阻害剤の開発 赤路健一 教授(京都薬科大学・薬品化学分野)

学生講演(1) 5-フルオロウラシルにより誘起される腸炎におけるNADPH oxidase 1 (Nox1) の関与

安田 仁(D2)(京都薬科大学・薬物治療学分野)

学生講演(2) 緑膿菌の上皮透過機構の解明 —上皮細胞への到達と透過について—

林 直樹 (D2)(京都薬科大学・微生物・感染制御学分野)

一般講演(3) 末期腎不全患者の謎—肝消失型薬剤の体内動態も変動する—

辻本雅之 講師(京都薬科大学・臨床薬学分野)



講演する乾学長



質問する大学院生



交流会で学生に語りかける藤吉教授



講演会風景

「光と色のイリュージョンin 山科」開催

山科区「人づくり」ネットワーク実行委員会が主催する理科教室「光と色のイリュージョンin 山科」が10月30日、京都薬科大学にて開催された。本イベントは山科地区の小学生を対象とした企画であり、理科に対する興味を持つきっかけになればと本学学生実習支援センターが中心となって行われた。当日はあいにくの空模様の中、約300名の応募の中から抽選で選ばれた105名の小学生が参加し、3種類の実験を体験した。白黒写真がカラーで見える補色残像を利用した実験では、白黒写真がカラーで見た瞬間、会場から「オー」という歓声が湧き起こり、上々の滑り出しを切ることができた。続く分光シートを使った光万華鏡の工作では、穴の開け方で模様見え方が変わるので色々試してみるようアドバイスすると大人の想像を超えた美しい模様が見える万華鏡を作る生徒もあり、子供の発想力の豊かさに驚かされる一面も見られた。また、インクの成分を台所にある物を利用して分離するクロマトグラフィーの実験では、黒が色々な色へ分離していく様子を観察する生徒から「わーきれい!!」と、楽しそうな声がいたるところから聞かれた。普段小学生相手の指導を行っていないため不安の中スタートした理科教室であったが、生徒と教員の垣根を越えたリラックスした雰囲気の中で自然の不思議を体験することができた。今回の理科教室を通じて、自然の不思議が身の回りに数多く存在し、これらの不思議を解明してく理科の面白さに少しでも気付いてもらえれば、本学教員として幸いである。

学生実習支援センター 助教 小関 稔

京都薬科大学公開講座開催

2011年11月12日（土）、躬行館T31講義室において、第17回公開講座を開催いたしました。はじめに乾学長の挨拶があり、その後、「高血圧と上手に付き合うために」というテーマで、本学の中田徹男教授による講演が行われました。血圧とは何かという話に始まり、血圧測定の方法、くすりの必要性など、人により異なる高血圧との付き合い方について講義が行われ、150名を超える参加者は、熱心に耳を傾けていました。高血圧というテーマが関心を呼んだためか、今年度初めて参加したという方も少なくありませんでした。

その後、場所を体育館に移し、健康科学分野、武田病院及びキリン堂のスタッフによる「健康度チェック」や本学OBによる「くすりの相談」「漢方薬の相談」、中田教授による「健康相談」のコーナーが設けられました。例年同様、健康度チェックではそれぞれのコーナーで順番待ちのところも多く出ていましたが、参加者は各コーナーを巡回しスタッフの熱心な説明に聞き入るなど大変好評でした。

毎年度リピータが多く見られ、健康に対する関心の広がりが見えました。また、本学での開催も14回目となり、「毎年、この公開講座を楽しみにしている」「近隣住民との関わりを持つ機会を設けていただいて有難い」といった感想が多く聞かれ、公開講座が地域に定着してきたことが感じられました。アンケートの中には「毎年、楽しみにしています」といった声が多く聞かれ、地域に開かれた大学として地域に定着してきたことが感じられました。



京都新聞2011年10月31日（月）朝刊に
当日の様子が掲載されました



学長挨拶



「健康度チェック」の様子

受賞・掲載

日本生薬学会学術奨励賞を受賞

生薬学分野の中村誠宏助教が平成23年度日本生薬学会学術奨励賞を受賞しました。本受賞は、生薬学分野の吉川雅之教授、松田久司准教授のもと一貫して進められてきたメディシナルフラワー（薬用花）から生活習慣病予防成分の探索研究が評価されたものです。2011年9月24日に授与式が行われ、翌25日に受賞講演が行われました。



天然物化学談話会奨励賞受賞

薬品化学分野の相馬洋平助教が天然物化学談話会奨励賞を受賞しました。天然物化学談話会は、天然物有機化学に加え、ライフサイエンスに関わる薬化学、有機合成、分子生物学など様々な分野の研究者が一同に会し、アカデミックな講演会を聴き議論しあう会です。また薬学、理学、農学、工学と、学部に関係なく参加者が集まります。本談話会では、天然物化学分野もしくは生物有機化学分野において顕著な研究業績を挙げるとともに、将来、これらの分野で活躍することが期待される若手研究者を奨励することを目的として、天然物化学談話会奨励賞が設けられています。平成23年9月27日～9月29日に開催された第53回天然有機化合物討論会の懇親会にて受賞式が行われました。



【写真】左側が受賞者の相馬洋平助教、右側が選考委員長の富岡清教授（京都大学名誉教授、同志社女子大学薬学部教授）

【研究題目】エステル含有ペプチドを基盤とした生物有機化学研究

【天然物化学談話会ホームページ】

<http://ndk.dip.jp/~shashin/danwa/danwa/award-recent.html>

第22回日本レチノイド研究会学術集会「武藤賞」受賞

2011年11月11日・12日に開催された第22回日本レチノイド研究会学術集会において、本学の薬品物理化学分野 土谷博之講師が「武藤賞」を受賞しました。

レチノイドなどのRAR α アゴニストが、レプチン依存的にインスリン抵抗性を改善するメカニズムを解明し、非アルコール性脂肪性肝疾患の治療に有用であることを示した発表が評価されました。

【演題】レチノイドによるレプチン依存的インスリン抵抗性改善作用メカニズムの解明

【演者】土谷博之、池田義人、小島千尋、江端優、勝間陸太郎、坂部友彦、濱進、小暮健太郎、首藤紘一、汐田剛史

第61回日本薬学会近畿支部総会・大会「ポスター賞」受賞

2011年10月22日に 神戸学院大学で開催された第61回日本薬学会近畿支部総会・大会において、本学学生がポスター賞を受賞しました。受賞内容は下記の通りです。

【演題】rhamnolipidsによる*Pseudomonas aeruginosa*の自己溶菌機構の解析

【演者】微生物・感染制御学分野 4年次 尾原 充章

【演題】C7orf24 (U7) に対する新規ペプチド型阻害剤による膀胱癌細胞の増殖抑制効果について

【演者】臨床腫瘍学分野 4年次 浅野 理子

【演題】ビタミンEの脂肪細胞におけるPPAR γ 非依存的脂肪蓄積促進作用

【演者】薬品物理化学分野 5年次 河原 亜里紗

【演題】有機触媒を用いた環化反応による1位置換テトラヒドロイソキノリン類の不斉合成

【演者】薬化学分野 6年次 石橋 洸一

総合薬学演習C (臨床薬学教育研究センター合同演習) テーマからの論文発表

総合薬学演習Cにおいては5年次の病院・薬局長期実務実習を履修していない期間のうち前半6週間に、臨床薬学教育研究センターにおいて分野枠を超えた合同演習を実施しています。ここでは学生が自らテーマを設定し能動的に医療薬学に関する調査研究を行っており、このたび6年次生の地寄悠吾君(臨床薬学教育研究センター所属)が総合薬学演習Cで取り上げたテーマについて、その成果が学術雑誌に掲載されました¹⁾。今後もこういった学内の合同演習を通じて研究活動に発展させる学生が続くことを期待します。

1) 地寄悠吾、他. ステロイド軟膏製剤の塗布量に関する新規基準の提案.

医療薬学, 37(11), 637-642 (2011).

臨床薬学教育研究センター 教授 高山 明

細胞工学(科学雑誌):一枚の写真館に掲載

病態生理学分野では、研究テーマの一つとしてアルツハイマー病に対するミクログリア(脳の免疫担当細胞)の関わりについて解析しています。この研究は約10年前にスタートしましたが、そのきっかけになったアルツハイマー病患者さんの脳病理切片の写真が、細胞工学の「一枚の写真館」(Vol. 30 No. 10:1011, 2011)にて「想像から創造へ」というタイトルで紹介されました。この「一枚の写真館」は研究の原点やターニングポイントとなった思い出の「一枚の写真」を取り上げて、その写真にまつわるエピソードなどを綴る連載企画です。

掲載されたのは当時病態生理学で実施した実験で染色・撮影された写真で、それをきっかけに病態生理学分野では、ミクログリアによる(アルツハイマー病の原因物質と考えられている)アミロイドβ除去の研究が始まりました。まさに原点と言える写真です。

また、この記事の紙面を拝借して、今回の東日本大震災で犠牲となった尊い命に対する深い哀悼の意を表し被災者の方々へのお見舞いならびに一日でも早い復旧を祈念させていただきました。

～紙面より～

このたびの東日本大震災により失われた多くの尊い命に対し深い哀悼の意を表しますとともに、被害に遭われた方々へ謹んでお見舞い申し上げます。

(途中省略)

最後に、この染色像をさらに想像力豊かに観察すると、あたかも震災で崩壊した瓦礫(老人斑)を皆(ミクログリア)が集まり片付ける様子にも受け止められる。日本は世界でも有数の地震国であり、い

つも大きな震災があるたびにそれを乗り越えさらなる発展を遂げてきた。今回も私たち日本人にはその力があると確信している。離れた場所からではありますが、私たちも身の回りの支援活動を通じて被災地の1日でも早い復旧を祈念しております。日本全体が当事者として、一丸となって復旧作業に取り組むべき意を込めてエールを送ります。「がんばるぞ! 日本」



お知らせ

人事

採用

生命薬科学系細胞生物学分野 助手 渡部 匡史
事務局進路支援課 事務員 太田 寛之
(以上 2012. 1. 1付)

昇任および配置換

事務局企画・広報課 係長 川勝 章広
事務局進路支援課 係長 森 洋介

昇任

事務局庶務課 主査 栗田 晃
配置換

事務局教務課 主査 近藤 利彦
(以上2011. 10. 1付)

出向契約終了

事務局進路支援課 主幹 北島 康光
(2011. 9. 30付)

受章

平成23年秋の叙勲

瑞宝小綬章 名誉教授 村西 昌三氏

平成23年秋の叙勲において、長年にわたる教育研究のご功績により、本学名誉教授 村西昌三氏が、瑞宝小綬章を受章されました。皆様とともに叙勲の荣誉を心からお祝い申し上げます。

京薬会だより

<卒業教育講座>

平成23年度京薬会主催の卒業教育講座は、400名の受講者を対象に5月29日、6月26日、7月31日、9月4日の4日間開講し、また、同講座のインターネット配信講座（卒業教育B）は9月～11月まで開講しました。この卒業教育は24年度からは全面的に大学の運営に移管されることとなり、生涯教育の一環として新たなスタートを切ることとなりました。京薬会としまでも円滑な移行を実現するために全面的に協力させて頂きたいと考えています。

<平成23年度京薬会支部総会>

支部総会が石川（10/16）、京都（10/22）、三重（10/23）、大阪（10/30）、岡山（11/20）、九州総会・佐賀（11/23）、東京（11/26）、愛知（12/4）、岐阜（12/4）、兵庫（12/11）の各支部で多くの会員の皆さん、また本学より来賓の先生方にもご参加いただき開催されました。

今後さらに多くの会員が参加されるよう、もっと参加し易い、また参加したくなるような企画が計画され、実施されるよう努力されています。

<ホームカミングデーの開催>

今年度の京薬祭は11月4日～6日に開催されましたが、この期間中の11月5日に昨年に引き続き京薬会主催の第二回「ホームカミングデー」を開催し、名誉教授や多数の卒業生が参加・里帰りされ、美しく生

まれ変わった母校に感嘆されるとともに、懐かしい先生やかつての学友との歓談、さらには卒業生と現役学生との交流と、非常に意義ある一日となりました。

<優秀クラブ表彰と特別表彰>

京薬祭のオープニングに合わせて本年も優秀クラブ表彰ならびに特別クラブ表彰を行いました。今年の優秀クラブにはサッカー部、硬式庭球部そして陸上競技部が選ばれ、また特別クラブ表彰には全日本学生剣道選手権等に出場し活躍された剣道部の鶴田弘明さんが選ばれました。選ばれた各クラブおよび鶴田さんには京薬会西野会長より表彰状ならびに副賞が贈られました。

<公開講座>

11月12日（土）に「高血圧と上手に付き合うために」と題して、本学の臨床薬理学分野教授 中田徹男先生が講演され、来場された皆さんは熱心に聞き入っておられました。また、健康チェックなども行われ、皆さんの健康に対する関心の高さを認識させられる一日となりました。

<駅伝大会とぜんざい会>

駅伝大会が陸上競技部主催、京薬会協賛で12月3日（土）に開催され、終了後に京薬会提供によるぜんざい会がおこなわれ、出場された選手、雨が時々降る中応援に駆け付けた皆さんに温かいぜんざいがふるまわれました。

京都薬科大学奨学寄附金ご芳名録

下記の方々から寄附をお寄せいただきました。ご協力ありがとうございました。

- * 高額のご寄附（10万円以上）を頂いた方は、京都薬科大学奨学金規則及び学生便覧に掲載させていただきます。
- * 敬称略、ご芳名のみ掲載しております。

2011年9月～11月に寄附をお寄せいただいた方々

<卒業生・同期会等（卒業年次順）>

植村 典二(昭14)	本岡美智子(昭37)	岡部佐子(昭43)	佐藤 史(昭45)	向江 康(昭63)
宇本 芳樹(昭28)	谷村紀美子(昭39)	岡村 武俊(昭43)	森 一二美(昭52)	浅野 元(平09)
向江 初子(昭31)	中尾 敬子(昭39)	古本 靖弘(昭43)	須永 富美(昭54)	岡村由紀子(平10)
植田 宗宏(昭32)	遠藤 妙子(昭41)	古本 良子(昭43)	松井 常孝(昭55)	京薬昭和40年
佐藤千鶴子(昭32)	斎藤 安正(昭41)	岡村 恭子(昭44)	森田 祐子(昭56)	卒業生一同
木村 恵一(昭34)	増田登美子(昭41)	高越 清昭(昭44)	大槻 浩子(昭58)	
渥美 行弘(昭37)	葛城 ユミ(昭42)	佐藤 耕作(昭45)	吉村 菊子(昭59)	
増谷 正(昭37)	匿名希望 (昭42)	匿名希望 (昭45)	荻原 吉康(昭63)	

<企業・団体・一般>

京都漢方研究会

<法人役員・評議員・職員（五十音順）>

大槻 浩(理事) 大原 松雄(監事) 宮川 喬行(評議員) 村澤 悟(局長)

<元教授>

野出 學

(2011年11月30日現在)